

心は「なぜ」、「どのように」社会的か？ ～フロンティアとアジェンダ～

(2012 年 3 月 17 日(土) 学術総合センター：東京・竹橋)

ポスター発表要旨 (12:00～13:30 1 階特別会議室 1～4) (☆：ポスターアワード受賞)

- 01 裁判員による目撃証言の信用性判断への情報处理的アプローチ
名畑康之 (北海道大学大学院)

裁判員(陪審員)の判断は、証言内容以外の要因によっても影響を受けることが知られている。ここでは、証言能力の評価が問題にされることの多い、証人の年齢、ならびに証人における障がいの有無を取り上げ、これらの要因が、裁判員による証言の信用性判断にどのような影響を及ぼすかを検討する。特に、裁判員による情報処理の過程(目撃証言に対して分析的な処理を行った場合、または自動的な処理を行った場合)および、裁判員の情報処理スタイル(合理的な処理スタイル、直観的な処理スタイル)との交互作用について検討を行う。

- 02 サンクション行動は複数の形態の間で一貫するか？
○波多野礼佳 (北海道大学大学院)
高橋伸幸 (北海道大学大学院)

相互協力の維持にはサンクションの導入が有効であることが示されてきた。先行研究で扱われているサンクションには「罰」か「報酬」か、あるいは「個人」か「システム」かの違いがあるにも関わらず(Yamagishi,1988;Fehr & Punishment, 2002;Rand, et al, 2009)、それらは全て一纏めに扱われることも多い。しかし、それらを引き起こす要因が同一であるかどうかについては実証データで確認されていない。そこで本研究では、サンクション形態を被験者内要因とし、サンクション行動間の一貫性が見られるか否かを、実験シナリオを用いて検討した。結果については発表時に報告する。

- 03 意味プライミング課題における表情処理の時系列的検討ー事象関連電位成分と自閉症スペクトラム傾向との関係ー
日高茂暢 (北海道大学大学院)

【目的】先行する文脈情報と表情刺激の矛盾を検出する過程について、事象関連電位を用いて検討を行う。

【方法】自閉症スペクトラム傾向のある定型成人を対象に、意味プライミング課題を用いた。またプライム刺激の呈示開始から表情刺激の呈示開始までの時間間隔 SOA を操作した。

【結果】文脈から逸脱する表情刺激に対して意味逸脱に感度がある N400 が惹起、SOA の延長による N400 の増大も見られた。また自閉症スペクトラム傾向が高い参加者ほど、SOA の延長に対する N400 が小さいことが示された。

【考察】この結果は、自閉症スペクトラム障害において、社会的場面における典型的な情動反応を予測することの困難を示唆する。

- 04 観察の手がかりが罰行動の促進に及ぼす影響
堀田結孝 (上智大学)

規範逸脱者への罰はヒトの大規模な協力社会を支える鍵として注目され、同時にコストを伴う罰が利益を得るかたちによって進化するかについても関心が注がれている。これに対し、近年の研究でコストを伴う罰も評判といった長期的利益の獲得に繋がる可能性が指摘されている(Barclay, 2006; Horita,

2010)。本研究は、規範逸脱者への罰が評判の手がかり（他者からの観察）を与えられることによって促進されるかを実験で検討した。本研究では他者からの観察を想起させる手がかりとして、明白な手がかり（参加者の決定が実験者に伝わる）と非明白な手がかり（目の絵の刺激）を用いて、観察の手がかりが不公正他者への罰を促す効果を有するかを検討した。

05 幼児のコミュニケーションロボットに対するパーソナルスペースのモデル化と計測
高橋英之（玉川大学）

幼児がロボットという人工物にどのように振る舞うかを調べることは、他者を理解する心の発達の背後にあるメカニズムを探ることにつながる。本研究では、幼児のロボットに対する興味を新奇性と親近性の二要因に分離し、それぞれの要因にもとづいて幼児がロボットとの心地よい距離（パーソナルスペース）を調整するモデルを提案する。そしてこのモデルにもとづき、興味の質に応じた幼児のロボットに対する距離のとり方をシミュレーションにより予測した。そしてこの予測にもとづき、モーションキャプチャと感性評価によって計測した実際の 2 歳児とロボットの交流の実測値から、その子供のロボットに対する興味の質を推定することを試みた。

06 ☆ロボットとの対戦ゲームにおける視線追従と行動の関係
○齋藤千夏（玉川大学大学院）
高橋英之（玉川大学大学院）
岡田浩之（玉川大学大学院）

硬貨合わせ課題という単純な対戦ゲームにおいて、ゲームの相手がヒトだと思い込むだけで、エントロピーで量化される行動の複雑さが増大することが分かっている。本研究では、ロボットとの硬貨合わせ課題における、エントロピーに影響を与える要因について、質問紙で測られるロボットのヒトらしさの印象と、ロボットが会話中に視線を外した際の被験者の視線追従の有無の二つの観点から調べた。その結果、ヒトらしさの印象は、エントロピーの大小とは有意な関係はみられなかったが、視線追従をしたヒトほどエントロピーが増大することが分かった。これは、ロボットの視線の意識が、ゲームにおける被験者の行動に影響を与えることを示唆する。

07 日中間の対立感情における多元的無知現象の検討
○横田晋大（広島修道大学）
李楊（北海道大学大学院）

現在、日中間における対立感情は一つの国際問題となりつつある。本研究では、互いの国に対する負の感情の表出が、自身の真の感情ではなく、他の内集団成員が抱く感情の推測から生じるという多元的無知に陥っている可能性を検討した。日本人 99 名、中国人 165 名を対象に調査を行った結果、両国で相手の国への負の感情は自分よりも他者の方が強いとみなされていた。ただし、この結果には自身は良い人でいたいとする自己奉仕バイアスが混交している。そのため、中立的な外集団（スイス）への感情の値を統制した。すると、日本では自他の感情の差が消えたが、中国では自他の差が残った。これより、中国の対日感情で多元的無知が起きている可能性がある。

08 約束による協力促進の認知的基盤
○植村友里（淑徳大学大学院）
松本良恵（淑徳大学大学院）
神信人（淑徳大学大学院）

人間社会で多様に用いられている約束は、破った方が得な状況でもしばしば守られる（Charness & Dufwenberg, 2006）。1-shot PD を用いた実験でも、事前に協力するというメッセージを送れる場合は、その約束を破ることができても、協力が促進されると報告されている（Miettinen & Suetens, 2008）。この約束が協力を促進する心理過程は如何なるものか。このことを検討するため、本研究は、事前に協

力の約束が可能な匿名の 1-shot PD を用いた実験を行った。

その結果、①人は約束を交わすことで、破ることへの罪悪感が高まり、②それにより協力が促進されることが示された。

09 報酬条件の違いが男子大学生の同調に及ぼす影響：サクラなしのアッシュ同調実験

○藤田勇輝（帝京大学）

守一雄（東京農工大学）

サクラを使わないアッシュ同調実験手続き(Mori & Arai, 2010)を用いて、報酬条件の違いが同調にどう影響するかを調べた。男子大学生 4 人組に、映像提示トリックにより、3 番目の回答者だけは線の長さが違って見えるようにした課題を提示し、この回答者がどれだけ他の回答者に同調するかを調べた。個人の正答数に応じて報酬が貰える「個人報酬条件」11 組と、4 人の正答数の合計に応じて報酬が等分される「等分報酬条件」11 組とで実験した結果、「等分報酬条件」では少数派のみに誤答 (=同調) が多く生じたのに対し、「個人報酬条件」では第 1 番目の回答者以外に多くの誤答が生じることがわかった。

10 Multi-armed bandit 問題におけるロコミを介した社会的学習の検討

豊川航（北海道大学大学院）

Multi-Armed Bandit(MAB)と呼ばれる最適化問題は、人間社会を含む自然界に広く内在する意思決定問題である。その本質は「各選択肢の質を調べるためには、有限の資源を消費して、実際に選択してみる他ない」ことである。よって、「探索する」と「腹を据える」とのトレードオフから意思決定の精度は決まる。本研究では、同じ MAB 問題に直面する他個体の行動を参照できる状況を考える。他個体の頻度(行動パターン)情報だけでなく他個体の得た Pay-off をも参照できれば、意思決定精度が上がるという予測を立てた。Pay-off 伝達の担い手としてネット上に見られる「ロコミ」に着目し、実験で検討した。

11 Relating risk preference, water rewards, and thirst: Utility and satiety state in monkeys

山田洋（国立精神・神経医療研究センター）

Standard economic techniques allow us to evaluate human risk-attitudes, although it has been technically difficult to relate these measurements to the overall wealth levels standard models employ as a critical variable. Previous work has, however, applied these techniques to animals to answer two questions: 1) Do our close evolutionary relatives share both our risk attitudes and our economic rationality? 2) How does satiety state (or wealth level in the language of economics) change risk-attitudes? Previous studies have provided conflicting answers to these questions. To address these issues, we employed standard techniques from human experimental economics to measure monkey risk-attitudes (utility function curvature) for water rewards in captive rhesus macaques as a function of blood osmolality (an objective measure of water wealth). Overall, our monkey subjects were slightly risk-averse in a manner reminiscent of human choosers, but only after significant training. Monkeys consistently violated expected utility theory early in training, indicating that traditional economic models cannot be used to describe their behavior at that stage. Once these choosers were rational, measured risk-attitudes were thirst-dependent. But unexpectedly, as the animals became thirstier risk-aversion actually increased, a finding that may be incompatible with some standard economic models.

12 ☆イヌにおけるヒトの指差しへの反応の柔軟性

高岡祥子（京都大学）

イヌが、直前に観察したヒトの行動によってそのヒトの指差しへの反応を柔軟に調節可能であることを

調べた。観察フェーズでは透明な 2 つの箱を用い、実験者はどちらかの箱の蓋を開ける様子をイヌに観察させた。“信頼性”高群では食べ物が入った箱の蓋を、“信頼性”低群では空の箱の蓋を実験者が開けた後、イヌに背を向け、その間に飼い主が箱の中の食べ物をイヌに与えた。テストでは不透明な 2 つの箱を用いて物体選択課題を行った。イヌが観察フェーズの経験に基づき実験者の特性を認識するならば、“信頼性”高群と“信頼性”低群では実験者の指差しへの反応が異なるのかどうかを調べた。

13 量子論的意思決定モデルの数理

浅野真誠（東京理科大学）

ゲーム理論は、複数のプレイヤー間の意思決定を解析する理論であり、ナッシュ均衡とよばれる解概念を中心として「合理的な意思決定とはなにか？」を説明します。しかし、囚人のジレンマゲームなどの例にみられるように、ゲーム理論の「合理的な意思決定」は矛盾をはらんでいる場合があります。本研究ではこの矛盾の要因を理論に組み込むためには、量子力学的な重ね合わせの状態を用いたフレーム・ワークの中でゲーム理論を捉えなおすことが不可欠であることを指摘します。さらに、最近の研究において私が提案した量子論的意思決定モデル、そこで解析される古典的意味での「合理的解」を得ない意思決定過程について説明します。

14 情報カスケードと相転移

○守真太郎（北里大学）

久門正人（スタンダード&プアーズ）

高橋泰城（北海道大学大学院）

情報カスケードは従来、自己修正的であり、十分多数の人が選択を行えば必ず正しい選択をすると考えられてきた。このことは 2 種類の壺の選択の実験において検証されている。一方、我々は、二択のクイズに対して約 50 人の被験者が次々と回答する実験を行った。その結果、クイズの難易度が高くなり、クイズの回答を知らない人の比率が増えると、回答の収束が非常に遅くなること。また、その比率が約 90 %を超えると、正しい回答に収束する場合と、間違った回答に収束する場合が共に起きうる状態になることを示した。この結果は、自己修正的な相から非自己修正的な相への相転移を意味する。

15 Psychological time and valuation of time discounting of gain and loss

韓若康（北海道大学大学院）

We demonstrated that the sign effect in time discounting (loss is less steeply time-discounted than gain) is due to a difference in psychological time across gain and loss. We examined how both psychological time and value function influence time discounting of gain and loss in 40 college students. Both psychological time and value function in time discounting of gain and loss were nonlinear with physical time and money, respectively. Psychological time in discounting of gain was longer than that in discounting of loss. Consequently, there was no sign effect in time discounting with psychological time.

16 日本におけるコジンシュギは幸福をもたらすか？文化心理学的アプローチ

○内田由紀子（京都大学）

荻原祐二（京都大学）

個人主義的価値観に基づく制度（成果主義、競争原理等）が日本社会に取り入れられるようになって久しい。これはグローバリゼーションと無縁ではないが、日本においては西洋とは異なり、個人主義の実践のために関係性を断ち切ろうとする方向に進み、その結果として幸福感が減じられた可能性がある。このような議論は社会学等で指摘されているが、心理学的実証研究はない。そこで本研究では（１）日本では個人達成志向を持つ個人は親しい関係性が少なく、幸福感も低いこと、（２）個人達成志向の状況を想起させた場合に、予測される幸福感が減少し、その効果が「関係性の剥奪」に媒介されることを示し、文化の変化が個人にもたらす効果を検証した。

17 ☆長く付き合いたい相手にはコストをかけて謝るのか？

○八木彩乃（神戸大学大学院）

大坪庸介（神戸大学大学院）

謝罪のコストリー・シグナリング・モデル (Ohtsubo & Watanabe, 2009) では、謝罪者が被謝罪者との関係を重視しているほど謝罪のために大きなコストをかけると仮定している。本研究では場面想定法により、この仮定の妥当性を検討した。参加者は親友／普通の友人に意図せず被害を与えた場面を想像し、謝罪の為にどのくらいコストをかけてもよいかを回答した。結果は、条件間でコストの程度に差はなかったが ($t(54) < 1$, ns)、普通の友人条件において、関係への期待が高いほど謝罪にコストをかける傾向があった ($r = .40$, $df = 25$, $p < .05$)。親友条件ではこのような相関はなかったため ($r = .05$, $df = 27$, $p = .81$)、モデルの仮定は普通の友人との関係にのみあてはまると考えられる。

18 ☆社会採餌による線条体の報酬前期/報酬期活動の影響

網田英敏（北海道大学大学院）

大きな遅延報酬よりも小さな即時報酬を選ぶことは衝動的選択と呼ばれ、不合理な行動と考えられてきた。しかし社会採餌する動物にとって、時・空間的に離れた餌は他個体に奪われるリスクが高いため、衝動的選択は合理的でありうる。これまでのニワトリ雛を用いた研究で、競争採餌の経験は持続的に衝動性を亢進することがわかった。また、競争は即時的には衝動性を亢進しないが、オペラント潜時を短縮させることがわかった。本研究では、競争による脳の報酬関連活動の変化を調べた。内側線条体から神経活動を記録した結果、報酬前期活動（予期の表象）と報酬期活動（餌の評価）にかかわる神経応答とともに競争によって減弱することを見出した。

19 幼児にみられる他者幻想

森口佑介（上越教育大学）

子どもはときに、目に見えない誰かやヒト以外のモノに名前や人格を与え、あたかも他者のように扱う。Imaginary Companion(IC)と言われるこの現象は、幼児期に最も頻繁に見られ、半数程度の子どもが経験するという。これまでの研究は、ICを持つ子どもと持たない子どもの間に、性別や出生順位などの違いがあることを示してきた。しかしながら、それら以外の要因については違いがなく、子どもがどのようなメカニズムでICを生成するかについてはほとんど明らかではない。本研究は、他者認識という視点からICを持つ子どもと持たない子どもの違いを検討した。その結果、ICを持つ子どもは、持たない子どもよりも、他者に対する感受性が強いことが示された。

20 パースペクティブの多様性とコミュニケーション：対話論的アプローチによる間主観性概念の再考ー熊谷有理（一橋大学）

本報告は多様なパースペクティブの関係性とコミュニケーションの問題を扱う。他者とのコミュニケーションの可能性をめぐる既存の議論は、コミュニケーションを自己と他者の間の一致を目指すものとして概念化してきた。だがこの見方からは、実際の他者とのコミュニケーションが調和や支配だけでなく革新や変化を含む多様な帰結に開かれることが理解できず、また、個別的パースペクティブの構成における他者の役割が見過ごされる。本報告では対話論的視点から自己と他者の関係性が分節化される社会心理的過程へ注目を喚起し、多様なパースペクティブの相違と共同性をコミュニケーションに状況づけられた関係論的現象として捉える見方を提出する。

21 ☆社会的促進・再考ー社会採餌は労働量を増やす

○小倉有紀子（北海道大学大学院）

松島俊也（北海道大学大学院）

他者がいることで行動が開始されたり頻度が上がったりする社会的促進(social facilitation)は、動物

にいかなる利益をもたらすのだろうか。ヒヨコ(ニワトリ雛)を用い、接近(餌に近づく)労働と消費(餌を採り尽くす)労働の社会的促進を検証した。

(1)接近 I字迷路の左右端から餌を与えるとヒヨコは餌場間を往復する。単独採餌群に比べ社会採餌群は往復運動量が多かった。

(2)消費 餌消費の難易度が高い条件下で、社会採餌群はトレイをついばむ回数が多かった。獲得餌量には差が無かった。

社会的促進はその場その時における利益を増やさない。他者にただ乗りすることによる飢餓リスクの低減、集合による捕食リスクの低減など、他の評価関数を考慮すべきである。

22 Maintaining harmony and uniqueness through cultural products: Cultural differences and influences by acculturation

石井敬子 (神戸大学大学院)

We hypothesized and found that people produce products (colorings of geometric patterns) reflecting their cultural values (harmony in Japan and uniqueness in North America), and that people prefer own-culture products over other-culture products, even without information about who produced the products, as a result of the evoked cultural values which are embodied in the own-culture products and shared by members of their own culture. Moreover, one's preference for products depended on one's identification with either one's heritage culture or one's host culture. This suggests impact of acculturation on reproduction and maintenance of cultural values.

23 ニーズへの注意が友情を育む？

○大坪庸介 (神戸大学大学院)

八木彩乃 (神戸大学大学院)

親密な関係の形成において、相手が自分のニーズに応答的であるという知覚(パートナーの応答性の知覚)が重要であると指摘されているが、その規定因はよく理解されていない。大坪ら(2011)は、何か困ったときに(ニーズがあるときに)相手が実際に援助をしてくれることを応答性と捉えることが問題であると指摘している。大坪らのシナリオ実験では、相手が自分のニーズに注意を向けていることを示す手がかりが応答性の知覚の規定因であり、効果的な援助の有無は応答性の知覚と関係していなかった。本研究では、大坪らの実験をよりシンプルな 2 (援助による利益の有無) × 2 (注意の有無) 要因配置実験に改め、結果が再現されることを確認した。

24 司法面接法による面接の繰り返しが目撃記憶の報告に及ぼす影響

井上愛弓 (北海道大学大学院)

先行研究では、面接を繰り返し行った場合に報告内容の誤りが増加することが示されてきた。一方、面接の繰り返しは必ずしも不正確な報告を引き出すものではなく、むしろ完全な報告を得るために必要なものであるとする知見もある。従来の議論では、先に与えられた誤情報が後の報告内容に与える影響と、面接を繰り返し行うこと自体が報告内容に与える影響について区別されていなかった。そこで本研究では、誘導の少ない面接法として開発された司法面接法を使用し、面接を繰り返し行うことが報告内容に及ぼす影響を調査した。その結果、司法面接法を使用した場合には、面接を繰り返しても報告内容の正確性は低下しないことが示された。

25 The emergence of in-group favoring behavior in indirect reciprocity setting

○小野田竜一 (北海道大学大学院)

高橋伸幸 (北海道大学大学院)

Generalized exchange is one of the mechanisms that characterize human society. Previous studies have shown that people practice generalized exchange only within group boundaries

(Yamagishi & Kiyonari, 2000) and that the consequence is in-group favoritism. However, they have not yet provided a satisfactory explanation for why such in-group favoring behaviors can be adaptive. The current study conducted a series of computer simulations to compare the evolutionary stability of In-group favoring strategies with that of Universalist strategies that ignore group membership. The results showed that in-group favoring strategies can be evolutionarily stable as well as Universalist strategies are.

- 26 北海道、岩見沢市美流渡の除排雪活動における人類学的研究
小西信義（北海道大学大学院）

除排雪に関わるリスクは、現代社会においても切実な課題であり、特に豪雪過疎地域ではそのリスクはさらに高まる。この課題に対し、旧産炭地域・豪雪過疎地域の人びとがどのように対応しているかを明らかにするため、岩見沢市美流渡で人類学的視点からのフィールドワークが展開された。その結果、人びとは自然環境や個体を取り巻く状況に応じ、個体または集団という単位において、さまざまな行動戦略を採っていることが明らかとなった。さらに、これらの行動戦略が互惠性に基づく活動であることを検討し、旧産炭地域・豪雪過疎地域という社会的・自然的環境における課題解決に寄与していることを指摘する。

- 27 The effects of initial interactions on self-esteem and depression: A comparison between win-lose and no-win-no-lose situations
○會田麻莉（帝京大学大学院）
大江朋子（帝京大学）

We conducted an experiment to examine the effect of initial interaction with an unacquainted person on self-esteem and depression. Japanese undergraduates (N = 113) participated in pairs in one of three interaction conditions: win-lose, no-win-no-lose, and control conditions. Participants in the win-lose and the no-win-no-lose interaction condition sat across from their partner, and did the rock-paper-scissors game or the hand clapping game, respectively. Data showed that, after the interaction task, participants in the win-lose interaction condition became depressed more than those of the other two conditions. No significant effect was found for score on the Rosenberg Self-esteem Scale.

- 28 身体感覚異常が自閉症傾向、社会認知機能に及ぼす効果に関する研究
豊巻敦人（北海道大学大学院）

自閉症スペクトラム障害において様々な感覚モダリティにおける過敏・鈍麻といった偏奇が見られる。近年の認知神経科学的研究から、感覚経験に随伴する顕著性の評価に関与する前部島皮質が、環境へ対処するための情報処理的認知機能に関わるネットワークと、自己意識や身体への注意を定位させるデフォルトモードネットワークを調節するという興味深い仮説が提案されている。本研究では、質問紙や行動課題を用いて身体感覚の偏奇が社会認知機能や、自閉症傾向に影響するかを検討した。結果は身体感覚の偏奇が社会認知機能の行動成績、自閉症スペクトラム指数と影響関係示されたことから自閉症スペクトラムの基本障害の一側面が明らかになった。

- 29 産業廃棄物不法投棄ゲームを用いた社会的ジレンマ状況におけるサンクション効果の検討
○北梶陽子（北海道大学大学院）
大沼進（北海道大学大学院）

本研究の目的は、監視・罰則が社会的ジレンマ状況において非協力行動をもたらす場合があることを例証することである。多くの先行研究では、監視・罰則が非協力行動を誘発する点についてほとんど示されてこなかった。本研究では、産業廃棄物不法投棄ゲームを用いて、監視・罰則が非協力行動にもた

らす影響を検討した。研究 1 では、利益当事者による監視条件、第三者による監視条件、いずれも存在しない条件を比較して、監視主体が存在する場合に非協力行動が多いことが示された。研究 2 では、監視も罰則もある条件、監視のみの条件、いずれもない条件を比較し、監視・罰則がある条件で非協力行動が多いことが示された。

- 30 ルール変更に伴う環境配慮行動の変容に与える影響:札幌市ごみ収集区分変更に伴う習慣変更の規定因
○白晶 (北海道大学大学院)
森康浩 (北海道大学大学院)
大沼進 (北海道大学大学院)

環境配慮行動研究の多くは行動意図を介したモデルが主であるが、それは行動意図を介さない行動が説明できない。近年、非意図的な行動の規定因を組み込んだモデルが検討されている。その一つが習慣に着目した研究である。本研究の目的はごみの不適正分別排出行動を習慣の観点から説明し、習慣的行動を変容させるきっかけの一つとして地域ネットワークの効果を明らかにすることである。札幌市では、2009 年 7 月より家庭ごみが有料化されると同時に収集区分の変更が行われた。本研究は札幌市在住者を対象に郵送アンケート調査を実施した。その結果、地域ネットワークは行動意図と非意図の両要因に影響を与えているという結果が得られた。

- 31 ☆トレードオフによる葛藤増加と延期の選択---意思決定における個人差要因に注目して
山田尚樹 (筑波大学大学院)

消費者は、属性間のトレードオフから生じる心理的葛藤を避けるため、選択自体を延期することがある。Tversky & Shafir(1992) は、このような現象が起こり得ることを実験で示した。この実験は、選択肢の数が新たに増えると元からある選択肢のシェアは増えない性質(=正則性の破れ)が起こりうることを示した。

そして、もし、このような現象の背後に何らかの個人差があるとしたら、個人差要因と延期の選択との関係を分析する必要がある。

本研究によって、第一に、正則性を満たさない人ほど論理的な傾向があることが分かった。第二に、正則性を満たさない人に選択の困難が媒介しているとする先行研究が示唆した内容を示した。

- 32 実験ゲーム行動に対する裏切り回避傾向と社会的価値志向性の影響
○三浦亜利紗 (北海道大学大学院)
品田瑞穂 (北海道大学大学院)
山岸俊男 (北海道大学大学院)

向社会的行動を規定する要因としては、主に結果に対する選好を測定する社会的価値志向性(SVO; Kuhlman, et al., 1986; van Lange & Semin-Goossens, 1998)の研究が進められてきた。しかし、Pruitt & Kimmel(1977)の Goal / Expectation 理論によると、他者の行動に対する期待もまた、行動に対し重要な役割を果たすとされる。本研究では、近年注目され始めた裏切り回避傾向(Bohnet et al., 2008)に注目して社会的リスクを回避する傾向を測定する指標を作成し、SVO のような結果に対する選好ではなく、他者に裏切られるという手続き上に関する選好が他者への期待や実験ゲームにおける行動とどのような関連にあるかについて検討した。結果、Betrayal Aversion や SVO、他者への期待は、それぞれ行動に対して独立した強い予測力を持つことが示された。

- 33 思春期における性的発達と社会性の高次化
高橋征仁 (山口大学)

ヒトの<反抗期>を科学的に解明することは、たんなる服従や同調にとどまらない、人間の社会性の複雑さや巧妙さを理解するうえで極めて重要である。なかでも、<第 2 次反抗期>=思春期にみられる権威への反抗や自己決定領域の拡大は、規範に統制された子ども時代から、規範を構成する成人期へ

の転換（道徳的自律性の獲得）と不可分に結びついていることが予想される。本研究では、Jonathan Haidt の道徳性理論を応用して、こうした思春期の反／非社会的特性が、性的発達を契機とした社会道徳的モジュールの高次化プロセス（規範の柔軟化、細分化、序列化、自己言及化）であることを明らかにする。人間社会におけるコミュニケーション戦略の個人的・文化的多様性は、この性的発達の観点から捉え返される。生物学や心理学の観点だけでなく、社会学の観点からみても、性は、人間社会の柔軟性や創発性、多様性の源泉であると考えられる。

- 34 社会的ジレンマ状況において共有認識が社会的現実感になるとき：排出取引ゲームを用いた検討
○長坂邦仁（北海道大学大学院）
佐藤浩輔（北海道大学大学院）
大沼進（北海道大学大学院）

社会的ジレンマ状況において個人のとり協力／非協力行動はプレイヤーそれぞれの状況の捉え方の違いによって決定される。本研究の目的は、社会的ジレンマ状況を模した排出取引ゲームを用いて、プレイヤーの相互作用の結果、状況の捉え方が徐々に共有された認識となり、社会的に表象される過程をデモンストレートすることである。8 ゲーム実施したところ、2 ゲームで滅亡した。滅亡したゲームでは、プレイヤーは排出取引状況を相互協力が必要な状況であると捉えていなかったが、滅亡しなかったゲームでは、相互の調整や協力が必要な状況であるという社会的現実感が相互作用によってプレイヤーの間で共有され、それが社会的に表象したと解釈できる。

- 35 心的イメージと視覚的短期記憶における保持過程の比較
山崎圭子（北海道大学大学院）

心的イメージは記憶情報をもとに、知覚的表象を形成・保持する過程と考えられる。一方で視覚的短期記憶は直前に知覚した表象の一時的な保持と考えられるが、両者の関係は明確ではない。本研究では、視覚的短期記憶の保持容量を反映するとされる事象関連脳電位の SPCN(Sustained posterior contralateral negativity)を用いて両者の関係を検討した。結果、イメージと短期記憶のどちらの場合にも同様に SPCN が観察された。また、文字刺激と無意味刺激のどちらにおいても、刺激を構成する部分の数は影響を及ぼさなかった。従って、表象の保持過程は両者に共通であり、複数の部分によって構成される刺激に関しても、単一のオブジェクトとして保持されていることが示された。

- 36 分配行動とリスク行動パターンの連動と脳機能の関係
○樋口さとみ（北海道大学）
犬飼佳吾（北海道大学大学院）
Kim Hackjin（Korea University）
松田哲也（玉川大学）
坂上雅道（玉川大学）
亀田達也（北海道大学）

人々は富の分配場面において、自身の利益のみならず他者の利益にも一定の配慮を示す不平等回避選好を持つということが、数多くの行動実験で実証的に示されてきた(e.g., Fehr & Schmidt, 1999)。本研究では、人々の不平等を忌避する選好の心理・神経基盤について、政治哲学者 Rawls の正義論において議論されている不平等を避ける行為とリスク下の意思決定との関連を基軸に実証的に検討する。本発表では、不平等回避傾向とリスク回避傾向に対する行動パターンの連動について検討すると同時に、機能的 MRI を用いた脳活動計測結果を基に、分配課題とリスク課題の2つの構成要素（効率性、平等性）の脳内表現について検討した実験研究について報告する。

- 37 社会的ジレンマにおけるサンクショニングメカニズムの4形態
○稲葉美里（北海道大学大学院）
高橋伸幸（北海道大学大学院）

人間の血縁関係の枠を越えた協力行動を維持する仕組みについて、これまでサンクションに焦点を当てた研究が多く行われてきた。しかし先行研究におけるサンクションは、サンクションの主体が「個人」の場合と「システム」の場合があり、またサンクションの方法も「罰」か「報酬」とまちまちであった。そこで、本研究ではこれらのサンクションのタイプを条件とし、人間がどのようなタイプのサンクションを行うのかをシステムティックに比較する実験室実験を行った。その結果、サンクションとして罰よりも報酬が用いられるという先行研究と一貫した結果が得られた。一方、サンクションの主体によってサンクション量は変わらないことが示された。

38 Culture as a set of self-sustaining system of incentives: Distinction between the cultural beliefs and cultural preferences

○橋本博文 (北海道大学大学院)

山岸俊男 (北海道大学大学院)

This research demonstrated that Japanese, compared to Americans, tend to expect that others around them would not behave independently, and that being independent or even positively evaluating an independent person, is negatively evaluated by others. While expected cultural differences were found in their expectations, their personal preferences were not different. Both Japanese and Americans personally prefer an independent manner and evaluate positively the independent person. The importance of cultural beliefs about others, and about other's responses to one's own behavior in analyzing the dynamics between culture and the individual's mind are discussed.

39 所有感と人の幸せを考える

早瀬光司 (広島大学)

2010 年と 2011 年に日本国内において、各 1000 名以上を対象にしたインターネットアンケート調査により、「所有する幸せ」と「行動する幸せ」のうち、人はどちらをより重視しているかについて調べたところ、「行動する幸せ」を重視する人の方が多く、また、女よりも男の方が、or 年齢の若い方が、or 学歴の低い人の方が、より「所有する幸せ」の方を重視していることが分かった。年収は、影響がなかった。こうした研究は、米国で一件あるのみである。そして、上記アンケート質問項目を深化・多様化したものを作成し、現在、米国で調査を実施中であり (2 月初旬に調査結果を受け取る予定)、3 月 17 日には、それらを解析したものも発表する予定である。

40 共同住宅における不適正排出・分別改善に向けたアクションリサーチ
—クリーンごみステーションキャンペーンでの参与調査—

○森康浩 (北海道大学大学院)

大沼進 (北海道大学大学院)

都市部では賃貸の共同住宅でとくに、不適正排出などの排出マナーに関する問題がある。このような問題に対し、一部の熱心な住民によって取り組みが行われることが多いが、本研究では不動産関係の企業、札幌市と連携し単身者向け共同住宅での排出マナーを改善するアクションリサーチを行った。

不動産関係の企業から許可を得た 6 つの物件で、3 つの擬似的な実験条件 (情報フィードバック、あいさつ活動、掲示のみ) を用い、1 ヶ月介入を続け、介入終了後 3 ヶ月に渡ってごみ排出状況の追跡調査を行った。

その結果、情報フィードバックを行った物件で介入終了後もしばらく低い不適正排出率が維持されたが、他の条件では介入終了後すぐに元に戻った。

41 ☆チンパンジーによるヒトの行動への自発的な同調と調節

○小林洋美 (九州大学)

延吉紀奉（到津の森公園）
桐山泰志（到津の森公園）
橋彌和秀（九州大学）

他者との姿勢や身体運動の同期は、ヒト間の社会的関係を形成促進する機能を持つ。目前のヒトの行動に対する同調をチンパンジーが自発的に行うか実験的に検討した。実験経験のない飼育チンパンジー（S）とのケージ越し対面遊び場面の文脈中で、実験者はジャンプあるいはスウィングの行動を随時繰り返した。Sの模倣に対する直接的な強化は一切行わなかった。更に、実験者が行動の速度を変化させた際のSの反応も観察した。実験者の行動変化後のSの行動を録画映像から抽出して分析したところ、Sは実験者がジャンプするとジャンプ、スウィングするとスウィングし、さらに実験者がタイミングを変化させると自らの動きを調整し同調を維持していた。

42 公共的決定場面において当事者性が行政への信頼に与える影響

佐藤浩輔（北海道大学大学院）

リスクコミュニケーション研究では、社会的意思決定主体（行政）への信頼にとって、個人的な利害の一致や代弁と、主体の誠実さや公正さといった意図性のどちらがより重要かという論争がある。本研究では、当事者性の高低が信頼と各要因の結びつきの強さに与える影響を検証した。シナリオは公共事業を巡り対立する架空の地域社会の論争を扱い、実験では参加者の当事者性（利害一致・対立・なし）を操作した。その結果、意図への期待は一貫して行政への信頼と結びついていたが、価値（利害）類似性は信頼への直接の影響は弱かった。このことから、必ずしも自身の個人的な利害にとらわれない、立場を越えた信頼が醸成できる可能性が示唆された。